

【登場人物】

青野 陽太（16）脳に病気を抱えた高校生

青野 早苗（42）陽太の母

青野 隆史（46）陽太の父

少女（ゆり）（16）病院で出会った女の子

奥村 由紀子（43）ゆりの母

奥村 晃（44）ゆりの父

橋本 悠人（6）小学生の男の子

橋本 藍子（28）悠人の母

○現在・××病院・陽太の病室

窓際でベッドを見つめる青野陽太（1
6）。

ベッドには意識不明状態の陽太。

隣で服を畳んでいる陽太の母、青野早

苗（42）。

陽太「母さん……」

早苗には聞こえていない。

○回想・通学路

歩いている制服姿の陽太。

陽太「雄也、翔、良樹……」

指折り数えている。

解けた靴紐。

○同・陽太の家・玄関

陽太「ただいまー」

早苗、駆け寄って来る。

早苗「おかえり。今日はどうだった？」

陽太、靴を脱ぐ。

陽太「別に、平気だよ」

早苗「そう。お風呂できてるから先入っちゃ
えば？」

陽太「うん」

陽太、階段を上がっていく。

その背中を見つめる早苗。

○同・同・陽太の部屋

沢山のメモが壁中に貼られている。

陽太、ベッドに座る。

陽太「こうへい……きょうへい……こう……」

ため息をつく。

立ち上がり、バッグの荷物を机に出す。

急な目眩に襲われ、床に倒れ込む。

狭まっていく視界。

机上のプリントの解答欄は落書きだら
け。

○現在・××病院・陽太の病室

陽太、ベッドにそっと近づく。

陽太M「最初は驚いた」

陽太、眠っている自分の顔を覗き込む。

陽太「（ぼそっと）俺ってこんな顔だっけ」

隣の早苗を見る。

心配そうに眠っている陽太を見つめて
いる早苗。

○同・廊下

陽太M「これは多分、幽体離脱ってやつだ」

陽太、前から歩いてくる男の子を見つ
ける。

すれ違いざま、顔を近づけ変顔をする。

陽太M「もちろん姿は見えてないし」

素通りする男の子。

陽太、男の子の背中を覗む。

○同・待合室

陽太、座ってうとうととしているお婆ち

やんの目の前で歌う。

かなり音痴な歌声。

陽太M 「声も聞こえてない」

お婆ちゃん、目を瞑って寝息を立てている。

陽太 「そんなに気持ちいい歌声だったかー」

○同・「屋上庭園」と書かれた扉の前

陽太の声 「便利なこともあるけど」

陽太、スツと扉を通り抜ける。

○同・屋上庭園

病衣姿の人、パジャマの子供、車椅子の人、看護師、あちこちに人がいる。

陽太、端でそれを眺めている。

陽太M 「なんか、ちょっと寂しい気もする」

少し離れたところで黄色い髪飾りをつけた少女（16）、しゃがんで花壇にとまっている蝶をじっと見ている。

少女の横顔に見惚れる陽太。

陽太 「（何か思いついたように）よし」

陽太、少女の真横まで歩いて行く。

蝶、飛んでいく。

少女に顔を近づける陽太。

少女、蝶がいた場所を見つめたまま無反応。

陽太、表情を切り替え、喉を鳴らして大きく息を吸い込む。

少女「ストップ」

口を開けたまま固まる陽太。

少女「（陽太を見て）もうちょっと練習してからにして」

陽太「え……」

少女「さっきのはひどかったなー」

クスツと笑う少女。

陽太「……見えてんの？」

少女、黙ってニコツとする。

陽太「うそ……」

少女「ほんと」

タイトル『時の記念日』

○××病院・廊下

並んで歩く、陽太と少女。

人を避けながら歩く陽太。

堂々と人をすり抜けながら歩く少女。

少女「普通もつと焦るけどね」

陽太「いや、焦ってるよ！まさか君が俺のこ
と見えてる」

少女「（遮って）違くて」

陽太「え？」

少女、陽太の体を指差す。

少女「その体のこと」

陽太の体を小さい女の子がすり抜ける。

陽太、病衣姿の自分の体を見る。

陽太「あー、似合っていないよね」

少女、呆れてため息をつく。

○同・陽太の病室

陽太「ここが俺の病室。んであそこ（顎をし
やくる）に寝てんのが俺」

早苗、ベッドの横に座っている。

少女「あれはお母さん？」

陽太、早苗を見つめる。

陽太「俺、病気なんだ」

少女「うん、じゃなかったら入院してな……」

陽太「脳が小さくなっていくらしい。記憶も無くなっていくし、いずれ体も動かせなくなる。あの体で意識を取り戻したとしてもそんな長くないんだ」

沈黙する陽太と、少女。

少女「（微笑んで）いいところに連れて行ってあげる」

陽太「？」

○同・屋上の扉の前

『立ち入り禁止』と書かれた扉の前に

立つ陽太と、少女。

横目で少女を見る陽太。

少女、扉をすり抜ける。

陽太「……（強く目を閉じる）」

陽太、少女に続く。

○同・屋上

陽太と少女以外、誰もいない。

夕日に染まった広大な空。

目を奪われる陽太。

少女「いいところでしょ」

走り出す陽太。

陽太「うわ、あそこに屋上庭園あんじゃん！」

陽太、柵に身を乗り出す。

少女「夜だと星空が綺麗だよ」

陽太「あ！あそこ俺の高校！」

少女「ねえ、私の話聞ってる？」

黙って夕日を眺めている陽太。

少女「ちよっと？」

陽太「……俺もう疲れちゃってさ」

少女、陽太の背中を見つめる。

陽太「結構しんどいよ。勉強もついていけな

くなっただし、友達の名前ですら思い出せな

い時もある」

少女「……」

陽太、夕日を指差す。

陽太「あの夕日に向かって走れー！って、
（振り返って）もうそんな体力残ってねー
っつーの」

笑いだす少女。

陽太「そんな面白いこと言ってねーけど」

少女「ちよっとだけ面白かったよ」

陽太、恥ずかしがって頭を搔く。

少女、陽太の顔を下から覗き込む。

少女「あれ？照れてる？」

陽太「うるせーよ。てか、それなに？」

陽太、少女の手首を指差す。

少女「あーこれ？ミサンガだよ。私、意外と
手先器用だからよく作ってたの」

陽太「へえ」

少女「あ、話そらしたでしょ」

陽太「ちげーよ！」

笑い合う二人。

陽太「……俺、陽太。君は？」

少女「私は」

○同・少女の病室（夜）

入り口には『奥村ゆり様』のネームプレート。

ベッドには少女が眠っている。

横に座っている、少女の母、奥村由紀子（43）と父、奥村晃（44）。

入り口付近で病室内を眺めている、陽太と少女。

陽太「じゃあ、ゆりは事故にあってから一週間もその体で？」

少女「そう。もう飽きちゃったよ」

陽太「だからか」

少女「なにが？」

陽太「いや、やけにこの体に慣れてるから」
自分の体を見る少女。

陽太「（ボソツと）なんか変だな」

陽太、由紀子と晃を見つめている。

陽太「親があんなに心配してんのに、俺たちは呑気に幽体離脱だよ」

呆れて笑う陽太。

少女「心配なんてしてたかな」

陽太、パツと横目で少女を見る。

少女は真っ直ぐ前を見ている。

陽太、由紀子たちを見て、指を差す。

陽太「あ、あれって……」

救急車の音が近づいてくる。

少女「まただ」

騒がしくなる病院内。

病室を出ていく少女。

陽太「え、なにが？」

慌てて少女についていく陽太。

○同・廊下（夜）

走っている少女と陽太。

少女「救急車、昨日は陽太君がきた」

陽太「どこいくの!？」

少女「見に行くの!」

○同・救急車専用入り口（夜）

救急車からストレッチャーが降ろされる。

救急隊員「7歳男児！心肺停止です！」

救急医「バイタルは？」

少女と陽太、走ってやって来る。

ストレッチャーには橋本悠人（6）が

乗せられている。

遅れて、悠人の母、橋本藍子（28）

が救急車から降りてくる。

藍子「（泣きながら）悠人！悠人！」

悠人を乗せたストレッチャー、『救命

救急センター』へと向かっていく。

藍子、必死について行く。

辺り一帯、静まり返る。

呆然と立ち尽くす、陽太と少女。

陽太「……」

少女「あんなに泣いたかな、私のお母さんと

お父さんも」

陽太「……当たり前だろ。なに言ってんだよ」

少女「なんでもない」

陽太、少女を見る。

少女「昨日の陽太君もあんな感じだったよ」

陽太「……」

先に歩きだす少女。

少女「じゃあ、私病室に戻るから。またね」

微笑んで去っていく少女。

陽太「……おう」

少女の背中を見つめている陽太。

○同・陽太の病室（夜）

時計は午前二時。

陽太、床であぐらをかいている。

陽太M「にしても、暇すぎんだろ」

陽太、ため息をつく。

陽太M「眠くもなんねーし、腹もすかねー」

早苗、椅子に座って寝ている。

陽太M「母さんは寝てるし」

陽太、立ち上がる。

陽太、眠っている自分の顔を覗き込む。

陽太「俺も爆睡」

早苗、眠っている陽太の手を握っている。

陽太、それを見る。

陽太「……」

○同・少女の病室（夜）

少女、眠っている少女をじっと見つめている。

× × ×

地面に横たわる少女。

静かに雨が降っている。

ぼんやり聞こえてくる救急車の音。

× × ×

ハッと我に返る、少女。

窓に近づき夜空を見る。

○同・屋上庭園（朝）

伸びをする陽太。

陽太「今日もいい天気だなー」

陽太、花壇の花を見つめる少女を見つ

ける。

陽太「おーい、ゆり！」

陽太、ゆりの方へ歩き出す。

悠人、陽太の背後から走ってくる。

悠人「ゆりお姉ちゃん！あっちにも蝶々いた

よ！でも逃げられちゃった」

悠人を見て、動きが止まる陽太。

陽太「え……」

少女「さっきあっちにもいたよ」

陽太「どうなってんだこれ……」

少女、陽太に気づく。

少女「あ、陽太君おはよう」

陽太、恐る恐る少女に近づく。

陽太「ゆり……お前、弟も……？」

少女「え？」

陽太「ほら」

悠人を見る陽太。

少女「（笑って）あー、違うよ。昨日の」

陽太、悠人の顔をよく見る。

×

×

×

救急車から運び出される、ストレッ
チャー。

泣きながらついていく藍子。

ストレッツチャーに乗せられている悠人。

× × ×

陽太「悠人……」

悠人「僕のこと知ってるの？」

陽太「生きてたのか！君、昨日の夜」

少女、慌てて割って入る。

少女「あ！あそこに大きなカブトムシいる！」

悠人「え！どこ！」

悠人、少女の指差す方へ走っていく。

少女「あの子には本当のことを言っていない」

陽太「え？本当のことって？」

少女「だから、悠人は病室で自分が寝ている

ことを知らないの。もちろん私たちのこと

もね。それに、私がここは夢の世界なんだ

よって言った」

陽太「まじかよ……」

悠人、カブトムシを探している。

陽太と少女、悠人を見る。

陽太「本当のこと言ったほうが良くないか」

少女「言えるわけないでしょ」

陽太「あの子の親も心配してるだろうし」

少女「悠人は迷子なわけじゃない」

陽太「いやでも……」

少女「じゃあ本当は君は今入院していて、いつ死んでもおかしくないんだよなんて言うの？」

黙り込んでしまう陽太。

少女「とにかく、今は言わないでおこうよ」

陽太「（腕を組む）にしても、夢の世界って

のはちよつとな……」

少女「仕方ないでしょ。咄嗟に考えたんだから」

陽太「もうちよつとマシな嘘あったら」

少女「文句ばっか言ってないで」

陽太「てか、カブトムシどこにいの？まだ六月なのにもういるんだ」

陽太、悠人の方へ走っていく。

陽太「悠人！いたか！？」

少女、呆れてため息をつく。

少女、陽太と悠人を見つめている。

○同・待合室

おじさん、漫画を読んでいる。

看護師 A「受付番号 503 番の方」

おじさん、顔を上げ漫画を閉じて立ち

上がる。

後ろから、

悠人「あー！」

陽太「今いいところだったのに！」

後ろで覗き見していた陽太と悠人、悔

しがる。

○同・エントランス

陽太、悠人を探している。

陽太「どこに隠れてんだー？」

悠人「陽太お兄ちゃん！こっちだよ！」

悠人、走って逃げる。

陽太「そこか」

親子が歩いている。

出口に向かって走りだす子供。

母親A「こら！病院で走らないで」

陽太、その目の前を走っていく。

陽太「まで！悠人！」

○同・診察室

藍子と医師が向かい合って座っている。

医師の背後には少女。

医師A「悠人君は非常に危険な状態です」

口元を抑える、藍子。

少女、医師の机の上のカルテを見る。

唇をかみしめて拳を強く握る少女。

藍子「先生……、悠人は助かりますか……」

○同・屋上

綺麗な夕空。

陽太の声「当たり前だろ！」

陽太と悠人、座って話している。

陽太「俺は知らないことなんてねーぞ」

悠人「じゃあ次の問題ね」

陽太「よしこい」

悠人「僕が一番好きなカブトムシはなんですか？」

陽太「（考え込む）んー、あれだろ、ヘラク

レスオオカブト！」

悠人「ブツブツ！三本カブトムシでした」

陽太「なんじゃそれ」

少女、やってくる。

少女「二人ともここにいたの」

悠人「（嬉しそうに）あ！ゆりお姉ちゃん」

陽太「ゆりどこ行ってたんだよ」

少女、陽太を見る。

○同・屋上庭園

悠人、花壇で何かを探している。

離れたところにいる陽太と少女。

陽太「やっぱりか」

少女「わかってたの？」

陽太「手足にアザがあった。それも一つや二つじゃない」

少女「まさかね」

俯く少女。

×

×

×

『虐待の可能性あり』と記載されたカルテ。

診察室ですすり泣く藍子の姿。

×

×

×

少女「もってあと一週間って言ってた」

陽太、悠人を見つめている。

陽太「そっか」

少女、陽太を見る。

少女「そっかって……それだけ？」

陽太、少女の方を見る。

陽太「それだけって？」

少女「いや、なんかもっと……」

陽太「（悠人を見て）悲しいよ。俺だって。

でも、これは悠人自身の問題だから」

少女「……」

陽太「（少女を見て）それに、俺たちだっていつ死んでもおかしくない状況だろ。明日かもしれないし……今、この瞬間かもしれないし」

沈黙する、陽太と少女。

少女「生きるか死ぬかは自由だと思う？」

陽太「え？」

悠人「ゆりお姉ちゃん！カブトムシいないよ」

悠人、駆け寄ってくる。

少女「えー？そっちにいたと思うけどなー」

少女、悠人と花壇の方へ行く。

陽太、二人の姿をボーッと眺めている。

悠人「陽太お兄ちゃんも来て！」

陽太「（ハッと）おう、いま行く！」

○同・待合室（夜）

外は雨。

陽太と悠人以外誰もいない。

陽太「すごい降ってるな」

外を見る陽太。

悠人「屋上で遊ぼうよ」

陽太「いや、でもさすがにこの天気だと濡れるよ」

悠人「濡れる？」

陽太「うん、濡れ……」

陽太、自分の体を見る。

陽太、悠人の顔を見る。

陽太「夢の世界だ」

悠人「ゆりお姉ちゃんも呼んで行こうよ！」

陽太「よし！じゃあ呼びに行こう」

陽太と悠人、歩きだす。

陽太、立ち止まる。

陽太「あ、俺が急いで呼んでくるからここで待ってて」

悠人「わかった！」

陽太、走っていく。

○同・少女の病室（夜）

少女、目に涙を浮かべている。

少女「ばか……」

遠くから聞こえてくる声。

陽太の声「ゆりー、いるかー」

だんだん近づいてくる声。

少女、涙を拭って病室を出る。

○同・待合室（夜）

陽太と少女が歩いてくる。

陽太「（自慢げに）この体なら濡れないじゃんって気づいたわけよ」

少女「そうだけど、こんな夜に外に行っても

……」

待合室には誰もいない。

陽太「おい！悠人！ゆり呼んで来たぞ」

響き渡る陽太の声。

陽太と少女、周囲を探し回る

少女「どこか隠れてるんじゃない？」

静かな待合室。

陽太「いない」

少女「どこ行ったんだろう」

顔を合わせる二人。

○同・廊下（夜）

走っている、陽太と少女。

少女「なんで？悠人は自分の病室の場所を知らないでしょ？」

陽太「俺にもわからない。そもそも病室があることも言ってないんだし」

少女「だったら他の場所を探した方が……」

陽太「でも屋上にも、庭園にもいなかった」

少女「そうだけど」

突然立ち止まる陽太。

少女、それにつられて止まる。

○同・悠人の病室・外（夜）

少女「……なんで」

悠人の病室の前で頭を抱え座り込んで
いる藍子。

悠人、その前に立っている。

悠人「ママ？どうしたの？なんで泣いてるの？」

恐る恐る近づくと、陽太と少女。

陽太「悠人……？」

悠人「あ！来てきて！ここにママがいる！」

少女「なんで悠人はここにいるの？」

悠人「二人を待ってたから、ママがいたの」

陽太「それでついていったってことか」

悠人「そしたら、見て！あそこに僕もいる」

病室内を指差す悠人。

指差す方を見る陽太と少女。

ベッドで眠っている悠人の姿。

○同・悠人の病室・中（夜）

ベッドには悠人が眠っている。

ベッドの悠人をじっと見つめる陽太。

悠人「あ、ママ」

藍子が病室に入ってくる。

藍子「悠人……ごめんね……」

藍子、泣きながら、眠っている悠人に

覆い被さるように抱きつく。

悠人「さっきからずっと言ってるんだよ」

陽太と少女、黙っている。

悠人「ママ、僕ここにいるよ。聞こえてないの？ねえ、ゆりお姉ちゃん、なんであそこに僕がいるの？寝てるの？」

少女、しゃがんで悠人と視線を合わせる。

少女「今から言うことをよく聞いて」

固まる悠人。

少女「本当はね、悠人は……」

陽太「悠人」

少女、陽太を見る。

陽太「悠人、これは夢の世界だって言ったろ。

そこにいるママも寝てる悠人も本物じゃないんだよ」

俯く少女。

悠人「だけどママが……」

陽太「行こう」

悠人の手を取り病室を出ていく陽太。

後続く少女。

○同・廊下（夜）

陽太とゆりと手を繋いで歩いている悠人。

悠人、後ろを振り返る。

悠人の病室からうっすらと明かりが漏れている。

○同・屋上（夜）

雨は止んでいる。

仰向けで空を見ている陽太と少女と悠人。

悠人「星なんてどこにあるの？」

少女「今は曇ってるから、見えないね」

無言の三人。

陽太「……悠人、ママのこと好きか？」

少女、陽太を見る。

悠人「うん、好きだよ」

陽太「そっか」

悠人「僕ね、パパがいないんだ。ママ一人だけ。たまに叱られちゃう時もあるけど、す

「ごい優しいんだよ」

唇をかむ少女。

悠人「（嬉しそうに）それに今度ケーキ買っ
てくれるって約束もしたんだよ」

陽太「……優しいママだな」

悠人「僕もうすぐで誕生日なんだ」

少女「いつなの？」

悠人「六月十日！」

陽太、体を起こす。

陽太「同じじゃん」

悠人「え！本当？」

悠人、体を起こす。

陽太「本当本当」

悠人「すごい！」

陽太「六月十日って時の記念日らしいよ」

少女、体を起こす。

少女「なにそれ」

陽太「日本で初めて時計が使われた日なんだ
って」

少女「へえ、初めて知った」

悠人「ゆりお姉ちゃんの誕生日はいつ？」

少女「七月二六日だよ」

陽太「そういえば、ゆりって何歳なの？」

少女「歳は一六だけど」

陽太「同じ年かよ」

悠人「僕はもうすぐ七歳！」

少女「まだまだちびっ子だね」

陽太「ゆりおばさんって言ってやれ悠人」

少女「やめてよ」

悠人「陽太おじさん！」

少女「ナイス！悠人！」

はしゃぐ三人。

悠人「ねえ、この夢っていつ覚めるの？」

笑顔が消える陽太と少女。

陽太「いつだろうな」

悠人「ずっと続けばいいな」

うっすら明るくなっている空。

○××病院・外観

綺麗に澄み渡っている空。

○同・屋上庭園

悠人と少女が追いかけてっこをして遊んでいる。

○同・陽太の病室

ベットの横に早苗。

陽太、窓際で早苗を見ている。

陽太「……」

陽太の父、青野隆史（46）病室に入ってくる。

陽太、ため息をつく。

陽太「父さんまで来なくていいのに」

○同・屋上庭園

悠人、飛んでいる蝶に目を奪われる。

悠人「蝶々……」

手を伸ばす悠人。

○同・陽太の病室

隆史「陽太は？変わりなし？」

早苗「うん」

隆史「先生はなんか言ってた？」

早苗、首を横に振る。

早苗「覚悟はしといてくださいって」

早苗、泣き出す。

隆史「泣くな。陽太も今、闘ってる」

隆史、早苗の背中をさする。

早苗「陽太は今までも病氣と闘ってた。ずっと

と頑張ってきた……」

隆史「陽太はきつと自分自身と闘ってるんだよ」

眠っている陽太の手を握る早苗と隆史。

陽太、早苗と隆史にゆっくり近づき手

を触ろうとする。

すり抜ける陽太の手。

その瞬間、

× × × ×

アラームが鳴る心電図モニター。

× × × ×

ハッと顔を上げる早苗。

ゆっくり、ピツピツと音が鳴っている

陽太の心電図。

隆史「どうした？」

早苗「なんでもない」

少女、走ってやってくる。

少女「陽太君！悠人が！」

陽太「！」

○同・悠人の病室

心電図のアラームの音が鳴り響く。

看護師と医師、悠人に心臓マッサージ
をしている。

端で見守る、藍子。

少女と陽太、走ってやってくる。

陽太「なんで……」

少女「またいなくなったから、ここに来たら

……」

陽太「俺、探してくる」

陽太、探しに行こうとする。

少女「いなかった！どこを探してももういなかった！」

立ち止まる陽太。

陽太「どっかに隠れてるんだろ……」

少女「……悠人は今そこにいるんだよ」

少女、心臓マッサージを受けている悠人を見る。

陽太、ゆっくりベッドに近づく。

陽太「悠人……起きろよ……」

医師、除細動器を悠人にあてる。

医師A「離れて！」

看護師B「はい！」

陽太、近づいて行ってベッドの横にしゃがみ込む。

陽太「おい……悠人！死ぬな！」

電気ショックを受けて、跳ねる悠人の体。

陽太「もう少しじゃなかよ！ケーキ楽しみなんだろ！」

脈拍がゼロになる心電図。

陽太「なんでだよ……」

涙を堪える少女。

その場で座り込む陽太。

○同・屋上

仰向けで空を見ている陽太。

少女やってくる。

少女「悠人、もう行っちゃったよ」

少女、陽太の横に座る。

陽太「俺、最低なこととしたな」

少女「陽太君は何も悪くないよ」

陽太「あの夜、悠人に本当のことを言っていたらなんか変わってたかな」

少女「……」

陽太「まだ六歳じゃねーかよ……」

少女「……あと四日だったね」

少女、仰向けに寝転がる。

少女「でも、悠人は強い子だったと思う」

陽太、少女を見る。

少女「あの子、私が見つけた時泣いてなかった」

たの。あんな小さい子だったら普通は訳もわからず泣くでしょ。でもじっと座ってた」

陽太「悠人は死にたかったと思う？」

少女「え？」

陽太「俺はさ、どうしようもないビビリなんだよ」

少女「そんなことないと思うけど」

陽太「この体になって、最初は一人でどっか遠くに行つてやろうと思った。けど出来なかつた。なんか寝てる自分と離れると死んじゃいそうだし。病院から一步も出れなかつた」

少女「それは当たり前だよ。誰だって怖いよ」

陽太「生きてる時に何回も死のうとしたくせにだよ。笑えるよな」

少女「……」

陽太「ゆりはもし意識が戻ったら、何した
い？」

少女「……陽太君は？」

陽太「俺は、またこの体に戻りたい」

少女「（呆れ笑い）何言ってるの。この体じや誰も気づいてくれないよ」

陽太「……もう嫌なんだよ。覚えてたいことも忘れていくし、一人じゃ出来ないことが今後もっと増えていく。でもこの体なら昨日あったことも、一昨日あったことも全部覚えてる。誰にも迷惑かけずにいられる」

少女、体を起こす。

少女「なんでそんなこと言うの？」

陽太、少女を見る。

少女「迷惑かけずにとって本気で言ってるの？死ねないことがビビリ？じゃあ死ぬことは勇氣ある行動なの？辛くても死なないのはただの馬鹿？死にたくなくても死んじやつた人は？」

黙る二人。

少女「……悠人はもっと生きてかかったと思うよ」

立ち上がる陽太。

陽太「お前はいいよな。事故だもんな。杖

か？車椅子か？もっと悪くても俺よりは長
生き出来るからよかったな」

少女「そうかもね……それでも私は言うよ。

絶対に生きた方がいい」

陽太「そもそも意識戻んのかね。このまま二
人仲良くご臨時中だったりしてな」

少女「……」

陽太「ゆり、この前俺に聞いたよな。生きる
か死ぬかは自由だと思うか？って」

柵にもたれる陽太。

陽太「俺は自由だと思う」

少女「じゃあ陽太君も死んじゃえばいい」

陽太「……」

少女「（立ち上がる）私はたとえどんな病気
でも、寿命が1日だとしても生きたい」

陽太「俺はお前みたいに強い人間にはなれな
い。もう俺に構うなよ」

去っていく陽太。

少女「陽太君、今までで一番後悔したことは
なに？」

陽太、立ち止まる。

陽太「（振り返って）病気になったことかな」
去っていく陽太の背中を見つめる少女。

○同・陽太の病室（夜）

早苗、ベッドの横に座っている。

陽太、横で眠っている自分を見つめて
いる。

陽太「なんでだよ……」

ベッドに背を向け、窓の外を見る陽太。

早苗「陽太……ごめんね」

陽太、振り返る。

眠っている陽太に話しかける早苗。

早苗「もう疲れたよね……陽太は十分頑張っ
てきたもんね……」

陽太「……」

早苗「覚えてる？五歳の頃、僕ウルトラマン
になるって言ってたよね。七歳になったら
サッカー選手、九歳の時には宇宙飛行士だ
ったね。病気になってからもいつもわざと

らしいくらい元気に振る舞ってさ」

涙目で早苗を見つめる陽太。

早苗「（泣きながら）でもいつからか将来のことは言わなくなっちゃったね……今の陽太の将来の夢はなんだろう……」

涙を拭う早苗。

早苗「陽太は頭いいから医者になるかな。それとも体鍛えて消防士とか？……陽太、起きてよ……」

陽太、早足で病室を出ていく。

眠っている陽太の目から涙がこぼれ落ちる。

○同・屋上庭園

陽太、柵にもたれて景色を見ている。

目の前を蝶が通り過ぎる。

蝶を目で追う陽太。

男の子A「あ！蝶々だ！」

追いかける男の子A。

男の子、近くにいたおばさんとぶつか

る。

母親 A 「こら、たける！」

母親、男の子の肩をつかんで視線を合わせる。

男の子 A 「今ぶつかったでしょ。悪いことした時はどうするの？」

男の子、おばさんの前に行く。

男の子 「（ペコツと）ごめんなさい」

おばさん 「大丈夫だよ。ちゃんと謝れて偉いね」

陽太、鼻でため息をつく。

○同・少女の病室前

『奥村ゆり様』のネームプレート。

陽太、歩いてくる。

扉の前で立ち止まり、一呼吸入れる。
意を決して扉をすり抜ける。

○同・少女の病室

扉の前に立っている陽太。

陽太「！」

少女、ベッドに座っている。

隣には由紀子と晃。

少女「退院したらすぐラーメン食べたい」

由紀子「ダメよ、最初のうちはまだそんなも

のは食べられません」

少女「学校には？」

由紀子「再来週からね」

少女「よかったー！やっとなんかに会える」

晃「それにしても、本当にゆりが回復してよ

かったよ」

ゆつくりと近づく陽太。

陽太「ゆり……」

医者、病室に入ってくる。

医者B「こんにちは。どう？体の調子は」

医者、カルテをベッドに置く。

少女「はい。もう全然平気です！」

由紀子「なに言ってるの。まだ歩けないでし

よ」

陽太、カルテを見る。

『17歳』と書かれた年齢の欄。

医者B「じゃあゆりさん、またあとで見にきますね」

医者B、病室を出ていく。

ゆり「はい」

陽太、じっとゆりを見る。

陽太「ゆり……じゃない……」

陽太、走って病室を出る。

○同・屋上

陽太、やってくる。

少女、寝転がって空を見ている。

陽太、ゆっくり少女に近づく。

少女「（空を指差して）見て、飛行機雲」

陽太、少女を見つめている。

少女「ほら！あっちにもある！」

陽太「……」

少女「……もしかして、バレちゃった？」

陽太「病室の君はもう起きてたよ」

少女「（微笑んで）バレちゃったかー」

陽太「……」

少女「あれ、本当は私じゃないの」

陽太「そんな訳ない……」

少女起き上がる。

少女「ちよつとだけ髪型が違ったでしょ。あと、これ。（髪飾りを指差す）陽太君も気づいたんでしょ。だからここに来た。そんな深刻そうな顔してね」

陽太「ゆりって……」

少女「ゆりは私の双子の妹」

陽太「じゃあ……」

少女、立ち上がる。

少女「私は二年前に死んだの。だから私の体はもうどこにもないよ。この病院にとりついたお化けってこと」

お化けのポーズをする少女。

陽太「意味わかんねーよ……なんで嘘なんてついたんだよ……」

少女「陽太君、私みたいに強い人間にはなれないって言ったよね。でもね、違うの。私

は強くなんかない」

○回想・少女の学校・教室

机に書かれた落書きの前で俯く少女。

少女の声「私、いじめられてたの」

生徒A「お前もう学校来んなよ」

生徒B「きもいんだよ」

少女の声「正直、地獄みたいな毎日だった」

○回想・ゆりの学校・教室

教室で友達と笑って話す、ゆり。

少女の声「ゆりはそんな私とは正反対だった。

進学校に通って、運動もできて、友達もた

くさんいた」

○回想・少女の家・リビング（夜）

食卓を囲んで夕食を食べている、晃、

由紀子。ゆり、少女。

少女の声「だんだん、私なんかどうして生きてるんだらうって思っちゃって」

作り笑いで周りに合わせる少女。

少女の声「家族にも相談なんて出来なかった」

○現実・××病院・屋上

陽太「もしかして」

少女「そう。自殺したの。二年前の六月十日に」

陽太「…ごめん、俺」

少女「いいのいいの」

少女、柵にもたれる。

少女「はじめて陽太くんに会った時、本当のことを言おうかとも思った。でもやっぱり怖かったの。自分なんかより、ゆりになりきった方が陽太君を…励ませると思った…嫌われないと思った…」

陽太「なんで俺なんかのことを…」

少女「生きるか死ぬかは私も自由だと思う。

地獄から抜け出した私の決断を『勇気がある』とか『今までよく耐えた』なんていう人はいると思う。でも私は生きることから

逃げただけなの」

陽太「逃げることは悪いことじゃない」

少女「でも、逃げたくせに他人には生きて欲しいって思うんだよ。ゆりにも、悠人にも

……陽太君にも」

俯く陽太。

陽太「……それってずるいかな」

少女「どうだろうね。私にもわからない。でもね」

陽太、顔を上げる。

少女「反対に、陽太君に生きて欲しいって思っている人、陽太君がいなくなったら涙を流す人も必ずいる」

陽太、自分の手を見る。

少女「私にはいなかったかもしれないけどね。でも私はそれでいい。お母さんとお父さんとゆりが幸せならそれでいいの」

陽太「……いや、そんなことないと思う」

少女「（笑って）そう言ってくれるだけでも……」

陽太、少女の手首を指差す。

陽太「手先が器用なのは、ゆり？それとも……」

○同・ゆりの病室

ゆり、由紀子、晃、楽しそうに話している。

陽太と少女、入ってくる。

少女「どうしたの？」

陽太「ほら、あの手首」

陽太、ゆりの手首を指差す。

ゆりの手首には何も無い。

少女「ゆりがどうかした？」

陽太、少女の顔を見て少女の手首を見る。

少女、陽太が自分の手首を見ていることに気づく。

自分の手首を見る少女。

ミサングがついている少女の手首。

少女「（ゆりを見る）……陽太君」

ゆりの手首には何も無い。

少女「私……見えない……」

陽太、涙目の少女を見て、少女の手を優しく握る。

その瞬間、少女の視界に一瞬光が走る。
少女、ゆっくり目を開いてゆり達の方を見る。

少女「どうして……」

ミサングのついたゆりの手首。

少女「どうしてそんなのまだ持ってるの……」

ミサングで結ばれている由紀子の髪。

少女「私なんかのこと……」

ミサングのついた晁のビジネスバック。

陽太「きっと大切に思ってると思うよ。今でも」

膝から崩れ落ちる少女。

少女「（泣きながら）ごめん……私死んじゃった……辛かったよ……助けて欲しかった……」

陽太「……」

少女「……久しぶりにお母さんの料理食べたいな。お父さんのつまらないギャグで笑いたいな。ゆりはなんでも出来るから私の自慢の妹だよ。また一緒に洋服とか買いに行こうよ……」

少女、微笑みながらも目からは大粒の涙。

少女、ベッドの方へ歩いていく。

少女「……ねえ聞いている？じゃあ今度またみんな旅行行こうよ。ね？いいでしょ？海行ったり、バーベキューしたりしてさ……
なんでよ……答えてよ……」

ゆり達には聞こえていない。

楽しそうに笑っている、ゆり、由紀子、晃。

涙を堪える陽太。

泣き崩れる少女。

陽太、病室を出ようとする。

少女「陽太君……」

陽太、立ち止まる。

少女「私の声はもう二度と誰かに届くことはないんだよ……会いたくても会えない。戻りたくても、もう遅いの」

陽太「そんなこと、俺に言うなよ……」

少女「私の一番の後悔はね」

陽太、振り向く。

少女「死んじゃったことだよ……陽太君、お

願い……生きて」

陽太、走って病室を出る。

○同・廊下

泣くのを堪え、人をすり抜けながら走っていく陽太。

陽太M「生きるか死ぬか、強いか弱いか、単純だけど漠然としていて薄っぺらく大きすぎる。なにが正解でなにが間違いか、答えがあるのかすら俺にはわからない。でも彼女のあの涙は『希望を持って生きろ』、なんてそんな聞き飽きたものとは少しだけ違った」

○同・階段

階段を駆け上がる陽太。

陽太の声「涙を流しながら立ち上がり、暗闇に向かって歩み続けること。そしてそれが俺にはまだ出来るということ。暗闇の先に光はまだ見えない。でもいつぶりだっただろうか」

○同・屋上

綺麗な夕空。

陽太M「こんなに自分の気持ちに正直になつたのは。生きたい。そう願ったのは」
夕日を見つめる陽太。

○××病院・外観

○同・ゆりの病室

ベッドに座っているゆりと由紀子。

ゆり「もう走れるかも」

ゆり、腕を振って見せる。

由紀子「無理に決まってるでしょ。来月までは松葉杖って先生言ってたんだから」

扉の隙間に紙が挟まっている。

それに気づき、紙をとる由紀子。

紙には『お母さん、お父さん、ゆり、ありがとうございます』と書かれている。

ゆり「それなに？」

由紀子「これ……（紙を渡す）」

ゆり「お母さん、今日って……」

由紀子「会いに来てくれたのかな」

○同・陽太の病室

陽太、入り口で病室内を眺めている。
後ろから、

隆史「おお、陽太。あまり無理しないで、横になつてた方がいいぞ」

隆史、嬉しそうに陽太の肩をさする。

陽太「平気だよ」

隆史「なんてたってお母さんが心配するから

な」

早苗の声「陽太ー、飲み物買ってきたよ」

早苗と目が合う陽太。

早苗「こら、陽太。まだ起きてちゃだめよ」

隆史「（笑って）ほらな」

陽太「さすが父さん」

早苗「二人してなに言ってるのよ。ほらほら」

早苗、陽太をベッドに誘導する。

陽太「もう平気だった」

早苗「陽太が好きなコーラとココア買ってき

たよ！どっちがいい？」

陽太「嘘だろ」

隆史「（ため息まじりに）水買って来るよ」

早苗「あ……、そっか」

笑う三人。

机には誕生日のメッセージカード。

『陽太、17歳おめでとう』の文字。

○同・陽太の病室

ベッドに座る陽太。

隣の椅子に座っている早苗。

陽太「あとどれくらいで退院？」

早苗「早ければ明日にでも退院していいって

先生言ってたけど」

陽太「明日か」

早苗「まだ心配だったら先延ばしにしてもいいのよ」

陽太「母さん、握手」

陽太、早苗に向かって手を出す。

早苗「なによ、急に」

陽太「いいから」

握手する2人。

早苗「なに？」

陽太「いやただの握手」

早苗「（嬉しそうに）変なの」

陽太「俺トイレ行って来る」

陽太、病室を出る。

早苗、にっこりと微笑む。

○同・屋上の扉の前

扉の前に立っている陽太。

恐る恐る扉を開ける。

綺麗な青空。

誰もいない。

陽太、大きく伸びをする。

後ろから、

少女の声「陽太君」

振り向く陽太。

少女、立っている。

陽太「お、久しぶりだな」

少女「あ、まだ見えるんだ」

陽太「確かに。てか普通に扉開いたし」

陽太、扉を指差す。

少女「確かに。立ち入り禁止なのにね」

陽太、仰向けに寝転がる。

陽太「この体に戻ると、たまにドア開けるの

忘れて突っ込んでじゃうよ」

少女「（笑って）それは流石にないでしょ」

少女、横に座る。

陽太「そういえばさ」

少女「ん？」

陽太「名前なんて言うの？」

少女「（笑って）今更聞く？」

陽太「いやなんか気になって」

少女「私は日向。夕日の日に向かうっていう

漢字ね」

陽太「日向……夕日の日に……」

日向、陽太の顔を見る。

陽太「！」

日向、笑い出す。

陽太「……いい名前じゃん」

日向「絶対思っていないでしょ！」

陽太「思ってるよ」

笑い合う二人。

陽太「（空を見て）ありがとうな、色々」

日向「やめてよ、そういうの。……こちらこ

そありがとう。陽太君でしょ。ゆりたちに

手紙書いてくれたの」

陽太「なんのこと？」

日向「ちよっと字汚かったけどね」

陽太「うるさいな」

日向、仰向けに寝転がる。

日向「お誕生日おめでとう。陽太君」

陽太「……日向、俺頑張って生きるよ」

日向の姿はもうない。

隣には蝶が止まっている。

陽太、蝶に手を伸ばす。

飛んでいく蝶。

陽太立ち上がる。

柵に持たれて景色を眺める。

○陽太の家・陽太の部屋（朝）

バッグに教科書を入れている制服姿の

陽太。

バッグを背負い部屋を出ていく。

部屋のカレンダーは七月。

二六日には『日向の誕生日』と書かれている。

○陽太の家・玄関（朝）

靴を履く陽太。

早苗「陽太、今日も気をつけてね」

陽太「うん、行ってきます」

早苗「行ってらっしゃい」

○通学路・歩道（朝）

陽太、歩いている。

松葉杖をついているゆり、バス停でバスに乗ろうとしている。

ゆり、昇降口の段差につまづき転ぶ。それに気づいた陽太、駆け寄り松葉杖を拾う。

ゆり「すみません、ありがとうございます」
陽太「いえいえ」

松葉杖を渡す陽太。

陽太、再び歩き出す。

発車するバス。

離れていく、陽太とゆりの距離。
ふと、バスの方を振り返る陽太。

陽太、靴紐が解けていることに気づき

結び直す。

そしてまた歩き出す。

○××病院・屋上庭園

強い日差しとセミの鳴き声。

花壇にはコーカサスオオカブト。

日向の声「悠人！いたよ！」

悠人の声「え！？どこ！」

日向の声「ほら、こっちこっち」

悠人の声「（小声で）わあ……三本だ……」

完